2017年10月29日中野教会・聖書の学び

聖書箇所：ヨナ書4:1-11

　　　　　　　　　　　　　　**「ヨナと神の憐み」**

　本日はヨナ書から学びます。お読みいただいた聖書の箇所はヨナ書4:1-11即ち4章全体ですが、まずヨナ書の全体の内容を概観いたします。ヨナというのは1:1でアミタイの子ヨナと呼ばれています。時代的にいつなのかについての記述はありません。しかし、列王記下14:25にアミタイの子ヨナの名が出てきます。「彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、主が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった」と記されています。ここで彼と呼ばれているのは北王国イスラエルのヤラベアムII世のことです。従ってアミタイの子ヨナはヤラベアムII世の治世かその少し前に登場してきた人物と推測されます。ヤラベアムII世はイスラエル王国全体で19人の王の内13番目の王で、BC8cの前半になります。その頃は大国アッシリアの弱体化した時期でイスラエル王国およびユダ王国とも勢力を拡大した時期です。特に北のイスラエル王国はユダ王国の領土を別にすればほぼソロモン王の頃の領地を回復し、シリアのダマスコも占領し、アンモン、モアブも属国化していたとみられています。エヒウ王朝の最後の時期であり、経済的にも繁栄した時期です。宗教的には異教の信仰が盛んであり、聖書記者からは悪しざまに評価されています。預言者の系譜でみると、エリヤ、エリシャの50年後くらいで、アモス、ホセア、イザヤ、ミカが活躍する少し前、ということになります。列王記下によるとヨナはガテ・ヘフェルの出身とされています。この町はガリラヤの小さな町でイエス様の出身地ナザレのすぐ北東にあります。なお、ヨナというのは「鳩」という意味の名前です。

　ヨナ書は十二小預言書に入れられていますが他の預言書とは少々異なります。ヨナ書の概略は次のようなものです。“ヨナはニネベが滅びる、ということを告げよ、と神様に命じられますが、これからのがれようとヨッパから遠く西方に行く船に乗りました。ところが嵐に出会い、その嵐はヨナが神様の命に従わないからであることが解り船員たちはヨナを海になげ入れます。ヨナは魚にのみ込まれ三日三晩、魚の腹に居る間に主なる神の信仰に立ち帰り、魚からでることができました。そしてニネベに滅亡の預言を告げます。するとニネベの町の人々が悔い改め、神様は滅ぼすのを止められます。収まらないのはヨナです。預言者としてのメンツ丸つぶれです。そこで神様はとうごまの葉でヨナを暑さから守りその後これを取り去ることによってたかがとうごまの葉さえ大切と思うヨナに対し、神様は12万人もの人間が住んでいるニネベの町を大切に扱うのは当然であろう、と教える”という物語です。他の預言書は神様の預言者に告げた言葉が中心的内容であり、裁きについて述べ、最後にイスラエルの回復の希望が語られる、という形式です。しかし、ヨナ書は預言の言葉としてはニネベ滅亡の預言ですが、これはニネベの悔い改めにより実現しませんでした。むしろニネベの人々に対する神様の憐みが示されます。またヨナ書には特別にイスラエル復興の希望が語られている訳でもありません。内容的には神様の人間に対する愛の大きさ、深さについて物語風に記述したもので、ヨブ記、ルツ記のような諸書に分類した方が良いかもしれません。おそらく、ニネベに対する預言がヨナ書の物語の出発点になっていることから、ニネベ滅亡預言の代表とも言えるナホム書の前に置かれたのであろうと思われます。ヨナ書ではむしろニネベは悔い改めにより滅亡を逃れるのですが、アッシリアは強さを回復しBC721年には北王国を滅亡させます。BC7c頃のナホム書により、アッシリアの滅亡が運命づけられ、ついにBC612年、バビロニアとメディアの連合軍にニネベが占領されアッシリアは滅亡致します。ニネベはアッシリアの首都ですが、現在のイラク、モスルのチグリス川を挟んだ対岸にありました。行き巡るのに3日かかる、とか12万人の住民が居たとか若干大げさな表現になっていますが、当時としては大都会であったに相違はありません。モスルは今、イラク第二の都市であり、例の「イスラム国」の占領下にありましたが、200万人の住民がいる、と言われています。先般、クルド人勢力がここを占領し、クルド人自治区とその周辺の産油地帯を含め、住民投票を行い、独立を宣言いたしました。周辺諸国は一斉にこれに反発しており、今後の行く末が案じられるところです。

　預言書の一般的な神学は“イスラエルが神の戒めを守らなかったため、罪の罰として国の滅亡と言う悲劇的事態が発生した。それでも神はイスラエルを見捨てず、救いの道を備えられる。従って、主の民はイスラエルの復興を成し遂げる救い主を待ち望み、主なる神を礼拝し、神の戒めを守り信仰を貫くべきである”というものです。一言で申命記神学と言います。ヨナ書はこれと大きく異なります。申命記神学は民族主義的であり、異教徒に対し排斥的態度をとりますが、ヨナ書ではなんと異教徒の権化のようなニネベの人々が「悔い改めた」ということで滅びから救われるのです。また、1:14節で、船員たちはヨナを海に投げ込む時“無実の者を殺したということで報復がありませんように”との祈りといけにえを捧げています。これは申命記21:8から来ています。船乗りたちを主なる神への信仰者として描いています。信仰がぐらぐらしているヨナより立派な信仰者としてこれら異邦人を見ているのです。そういえばヨブもシリア砂漠の民族的には異邦人でした。ルツもモアブの女です。モアブは死海の東に位置し正統的ユダヤ信仰からすれば異邦の民です。このように異邦の民を主なる神の信仰者として扱う箇所は旧約聖書の随所にあります。バビロニアの王ネブカドネザルやペルシャ王クロスを主の僕として扱うのもこの思想的流れの一つと言えます。そもそも創世記からして、イスラエル以外の血統も同じ祖先から出た者で、神の祝福の輪に入れられています。旧約聖書には選ばれた民イスラエルの民族主義的信仰の流れとともに、異邦の民も主の民であり救いの道が開かれているのだとする解放的信仰態度の流れがあるのです。イエス様の福音は後者の流れの中にあり、パウロが具体的に異邦人伝道と言う形で基礎を形成いたしました。もちろん、イザヤ書、エレミヤ書のように神様の救いの希望の中にこの信仰の開放性を見せているものもあります。ヨナ書は12預言書のなかでもっぱら異邦人の信仰について語っている点で独自性がある、と言えます。イスラエルの信仰は唯一神である、一元論ですから、異邦人も神様の創造の業のなせるものであり、最終的には主なる神を礼拝する民となるはずだ、というのは論理一貫しています。旧約聖書は単に申命記神学に添って叙述されているのみではなく、異邦の民を含む世界大の広がりを持った開放的信仰態度の流れもある、ということを心に留めてください。

　ヨナ書4章はヨナ書全体のまとめのような意味も持って居ますので、これを節毎に見て行きたい、と思います。1節ではヨナが怒ったと言っています。「ニネベは滅びる」と予言したのに、神様はニネベの悔い改めにより思い直し、ニネベを滅ぼさなかったからです。“こんな皆がいやがる預言を言わされて、挙句の果ては、神様が心変わり、というのはあまりといえばあまりである”というのでしょう。この世の中の常識からすればヨナの怒りもよく解ります。しかし神様の人間への取り扱いは全然違います。ニネベの民が神様の恵みに答え、悔い改めの態度を示すと、滅びの運命を変更するのです。ここにもイスラエルの主なる神の特徴があります。神様は祈りに答え、決定を変更することがある、というのです。通常神様は絶対的な存在ですから神様の決定は常に最終的であり変更するなどありえない、というのが当たり前ですが、キリスト教の神様は「思い直す」ことがある、というのです。もっとも、神様は決定を変更したのではなく、人間を憐れむ故に決定を猶予しているのだ、という神学理解をする考え方もあります。その猶予された裁きがイエス・キリストにより担われ、決定的に罪から解放されるのです。しかし、旧約聖書の叙述をそのまま素直に受けて、我々の神様は熱心な祈りと悔い改めの信仰を見て、「思い直し」をしてくださる慈愛に満ちた神様です、と言っても良いと思います。キリスト教の神様は人格神である、といわれますがそのような慈愛をも含む、と理解しても良いでしょう。この「思い直す」と訳されているヘブル語の言葉は「na:ham」と言う動詞です。この言葉は極めて多様な意味を持って居ます。聖書に出てくる回数の大い順に訳を申し上げますと、「慰める」「慰められる」「同情する」「憐れむ」「思い直す」「悲しむ」「励ます」「悔いる」というような訳が与えられています。何かを悔いて思い直したり改めたりする、という意味系列と、何かを憐み、同情し、慰め、慰められるという意味系列に分けられると思います。民数記23:19に「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。 人の子ではなく、悔いることがない」とありますが、この「悔いる」は「na:ham」の変化形で「itneha:m」です。またイザヤ書40:1に有名な「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」と あなたがたの神は仰せられる」という言葉がありますが、この「慰めよ」が「na:ham」の命令形で「nahamu:」です。「悔いる」と「慰め」では意味が大きく異なりますがヘブル語では同一単語です。ヨエル書の場合3:9、3:10、4:2の3箇所に出てきます。「悔いる」の意味系列です。“深い憐みにより決定を思い直す”というように両系列の意味を統合して理解するのが良いと思われます。

　2節ではヨナが怒りの説明をしています。ヨナは最初から神様は「情け深くあわれみ深い神であり、怒るのにおそく、恵み豊かであり、わざわいを思い直されることを知っていた」と言っています。神様は思い直しニネベを許すので自分の預言の告知はうそになってしまう、ということが解っていた、というのです。そのため預言の告知を逃れようとタルシシュ行の船に乗った、と言う訳です。タルシシュは今のスペインにあった町というのが有力ですが、イタリアのサルディニア島ではないか、という説もあります。要するに西の果てで神様も追いかけてこないだろう、という地ということです。3節では「主よ。今、どうぞ、私のいのちを取ってください。私は生きているより死んだほうがましですから。」 と言っています。この表現は、8節にも出てきます。3節では当たらない預言をふれ回った自分は恥ずかしくて生きて居られない、死にたい、というもので、8節は太陽光線を遮るとうごまの葉がなくなって熱中症になりそうで、死んでしまいたい、というのです。一方は精神的理由、他方は肉体的理由ですが、自分の期待通りにいかないとすぐ死んでしまいたい、ということを言い出す我々を見ているようです。実はこれは神様の導きの一つなのですが、その気づきはなく、不平から来る自虐的態度です。4節ではちょっと変わった表現が出てきます。「主は仰せられた。「あなたは当然のことのように怒るのか。」とあります。神様の言葉の部分を直訳すると「お前は怒るが、良いことか」ということになります。同様の表現は9節にも現れます。2節で神様は怒るに遅い、と言っていますが、ヨナは簡単に怒りを表し、それは良い事だと考えて居るのか、という疑問が主から投げかけられます。神様は“それは悪い事だ”と決めつけず、ヨナが自ら、神に怒りをぶつけるのは良くない、と気づくように導いています。キリスト教の神様は人間が自発的に自分の非に気づくことを期待しているのです。人間の自由意志が良きように働くことを神様は望んでいるのです。5-9節では「qi:qa:yo:n」即ち「とうごま」による譬えがでてきます。これはエジプト語のキキから来た言葉と推測される「とうごま」のことと考えられています。旧約聖書のギリシャ語訳では「kolokuntha」即ち「ひょうたん」と訳されています。いずれにしろ、葉っぱが比較的大きく日よけになるような植物ということでしょう。それが神様によって備えられヨナは喜びますが、今度は神様がそれを虫にくわせて、なくしてしまうと、またうらみつらみで神様に不平を言うヨナの姿が描かれています。なんと我々と似ているのでしょう。6-8節でそれぞれ「とうごま」「一匹の虫」「東風」が備えられた、とあります。この言葉は神様が備えたのであり、神様の導きの結果であることを意味しています。人間にはそれが、偶然とか自分の努力の結果としてしか見えないのです。後になってゆっくり考え直してみると、やっと、“ああ、あれは神様の導きだったのだ”と気づく、というのが我々の現実です。最後まで導きとは思えず、単に自分は運が悪い、と考えて世の中に文句を言い続けることもあります。最後の11節で神様が「思い直し」た、その心が示されます。「わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」と言われています。

　ニネベの人々は主なる神の民として選ばれた人々ではありません。申命記神学の流れからすれば悪のはびこる町として滅ぼされなければなりません。主の戒めを堅く守る民に作り替えられたわけでもありません。のちのナホム書にあるように、滅びに定められた町なのです。ところが神様は滅ぼすことを一時的であれ「思い直し」ました。この思い直しが起きるためにニネベの人々はなにか偉いことをしたでしょうか。唯一ニネベの人が行ったことと言えば悔い改めです。そして神様はニネベの人々が「悪の道から立ち返るために努力している」のを認め、ニネベの町にわざわいを与えることを「思い直し」たのです。

　ヨナの物語りは、古い物語りであったようで、伝承の形で、イスラエルの人々の記憶にとどめられたようです。旧約偽典と言われる文書の中に、『預言者の生涯』という文書があります。ヨナは怪魚から放り出されたのち、ニネベからイスラエルの地に帰り「もし石が憐みの叫びを発するのを見るならば、終わりは近い。」と予言した、と書かれています。また、AD1cに書かれたイスラエルの歴史書であるヨセフスの『ユダヤ古代誌』では、旧約ヨナ書の物語りを紹介しながらも、アッシリアに対する覇権喪失預言を語るのみです。「神の思い直し」や「ニネベの悔い改め」の話はありません。これらを見ますと、ユダヤ教の中では、ヨナ書はヨナによる神の裁きに関する預言として人々の記憶に記されていた、と言えそうです。新約聖書ではイェス様が「ヨナのしるし」として述べられています。マタイ12:39では「イエスは答えて言われた。「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。」と記されています。「ヨナのしるし」とは主なる神の裁きを告げる証人のことです。そのしるしは預言者ヨナ自身であり、当時エリヤの復活が望まれていましたが、ヨナと同様に主なる神の裁きをのべ、エリヤの再来とうわさされていたバプテスマのヨハネでした。バプテスマのヨハネの宣教の第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたからです」です。ここには、ヨナ書の裁きの側面の裏側にある悔い改めの勧めが現れています。ヨナの物語りに示されたニネベの悔い改めのテーマはこの「ヨナのしるし」の背後にあったのです。ユダヤ教の祭りの一つにヨム・キプールという「贖罪日」があります。この日にはヨナ書がよまれることになっています。それは悔い改めによる主の救いを願うためです。ヨナ書に示された「悔い改めの救いの約束」を思い起こすためです。イスラエルの民衆にとっては「主なる神のさばき」と同様に「悔い改めによる救い」のメッセージでもあったのです。この祭りには贖罪の供え物としてカバロットという鶏を頭の上で振り回すという儀式もあります。これはイザヤ書53章の「主の僕」による贖罪、そして主イエスによる贖罪の業（わざ）につながります。ヨナ書のメッセージは主イエスにより現実のものとされ、主イエスの再来により完成する、神の国の福音なのです。

　一点申し上げるべきことがあります。ヨナと私たちキリスト者の関係です。神様の招きから逃れるヨナ、苦難になると神頼み的に主に懇願するヨナ、他の人が恵みの中にあるようだと不公平だと文句を言うヨナ、苦しい状況に立たされるとすぐ死んだ方が良いなどというヨナ、実に自分自身を見せられているようで恥ずかしくなってしまいます。しかし私が強調したいのは、そのような罪の現実から抜け出ることができない私たちの事ではありません。このようなぐらぐらした信仰にも拘わらず、主の導きが一貫してヨナにあると言う点です。裏返して言えば、主なる神の選びは決定的であり、その選びにあった私たちは、主の手から逃れることは出来ない、ということでもあります。

1. 第一に、ヨナは神の前から逃れることは不可能であることを発見します。タルシシュに逃れようとしたヨナは結局逃れることは出来ませんでした。クリスチャンは主イエスより逃れることは出来ません。たとえ教会を離れるような時があっても、主イエスは「立ち返れ」と呼びかけています。
2. 第二に、ヨナは神の務めから逃れることは不可能であることが知らされます。結局、ニネベに滅びの預言の告知をするのです。私たちクリスチャンには自分でも気の付かない使命を与えられています。やりたくない、といってもその使命を果たさざるを得なくなります。どうせそうなるなら、覚悟を決めて喜んでやった方がましです。
3. 第三に、ヨナは神の愛から逃れることは不可能である、ということを知らせています。いくら神様に悪口を叩いても神様はヨナを導いてくださいました。イエス様も最後まで解っていない弟子たちを復活後も導いて下さいました。

私たちクリスチャンも“これこそ神様が私を愛してくださっている証拠だ”と言えるなにかがあります。“まるでどうしようもない人間である”と解っている事こそ、神の愛の証拠なのかもしれません。どんな犯罪を犯す結果になっても主イエスは見捨てることはない、ということです。私たちが自分で“生きている価値はない”と確信しても主イエスは私たちを愛して導こうとしている、という事実がある、ということです。ヨナ書の中から私たちは溢れる主の恵みを受けることができます。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日はヨナ書から「思い直される」神様のことを学びました。滅びに定められていたニネベの町、即ち我々を滅びから思い直されました。ただ主に立ち返ると決心するだけで良いのです。私たちを大いなる恵みの中に入れてくださりありがとうございます。その主の証人として歩むことができるよう、知恵と力と勇気をおあたえください。我らの主イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン）